

「外国人早期適応研修カリキュラム」研修案

第3回

テーマ	第4章「生活ルール／交通」P. 20～24
-----	-----------------------

目安時間	項目	内容
	◆事前準備物	外国人 ・テキスト、ワークシート、事前の予習 教師 ・動画1つ（公式） ・イラストや写真（標識、公共交通機関 等のPPT） ・ワークシート模範解答 ・自分用レジュメ ・レアリア（ICカード、路線図、イヤホン、傘）
3分	◆到達目標	・日本の正しい（歩いたり自転車に乗る時の）交通ルールを理解する。 ・電車、バスの乗り方を理解する。（路線図を見る。切符が買える。） ・公共交通機関に乗るときのマナーを理解する。 PPTにトピック名とイラストを添えて目標提示 ※安心安全な生活が送れるように、日本の交通ルールを正しく理解しましょう
5分	◆ウォーミングアップ	イラスト画面共有、ミャンマーの交通ルールについて質問→ ミャンマーでは… ・車は道路のどちら側（右？左？）を走りますか？ ・運転席はどちら側（右？左？）ですか？ ・人が歩く道では、どちら側（右？左？）を歩きますか？ ミャンマーと日本、違うところをしっかりと理解しましょう 再度目標確認、導入

コメントの追加 [0岩成1]: しっかり準備されていて素晴らしいです！

コメントの追加 [0岩成2]: どれも具体的でとても良い質問の仕方だと思います。到達目標に自転車の乗りかたに関する項目もありますので、ここに「ミャンマーでは自転車に乗るとき、どんなことに気を付けますか？」などの質問も加えてみてはいかがでしょうか？

42分	◆活動内容	<p>交通ルールについて (15分)</p> <p>①道を歩くとき 自転車に乗るとき テキストにて〔受講生に読んでもらいながら〕説明 P.20 PPTにて標識確認</p> <p>②自転車の乗り方〔受講生に読んでもらいながら〕 P.21 説明 →質問 ×は何故ダメなのか？(リアリア かさ、イヤホン等使用)</p> <p>③動画視聴 →質問 日本のルールに従って歩いたり自転車に乗れそうですか？</p> <p>④自転車防犯登録について 説明 P.22 PPTにて登録シール 駐輪場 確認 (日本で自転車を使うときは会社の人に相談のこと)</p> <p>→質問 ⑤信号の色、位置について確認 ミャンマーでは？ PPTにて説明 赤 青(緑?) 黄色</p> <p>公共交通機関の乗り方 (10分)</p> <p>①電車の種類 テキスト P.22 その後 PPT イラスト写真で具体的に確認 →質問ミャンマーでは、よく使うのは？</p> <p>②電車の乗り方 テキスト P.23〔受講生に読んでもらいながら〕路線図、切符購入、改札流れ説明 →質問 ミャンマーにはこのような IC カードはありますか？ (リアリア)</p> <p>PPTにて、改札に入るとき(切符投入、受取/ICカードタッチ)と出るとき(切符投入のみ/ICカード再タッチ)の確認</p> <p>③バスの乗り方 テキスト P.23〔受講生に読んでもらいながら〕説明 ※ICカードが使える(バスや他の電車 共通で使える) ※降りるとき、ボタンを押して知らせる 余裕があれば「バス停」「停留所」PPT イラスト等で説明</p> <p>公共交通機関に乗る時のマナー (10分) テキスト P.24〔受講生に読んでもらいながら〕説明 質問→ 優先席とは？具体的にどんな人？PPTにて説明 余裕があれば「つり革」「アナウンス」PPT 等で説明</p> <p>まとめ、振り返り (7分)</p> <p>①ワークシートに記入 (1), 2, 5のみ ②PPTにて到達目標の確認</p>
-----	-------	---

コメントの追加 [0岩成3]: 前回は引き続き、テキストの内容を網羅されていて盛り沢山なので、テンポよくいきましょう！活動全体の工夫や流れはわかりやすくてとても良いですね。

<工夫したこと>

・テキストも受講生によんでもらったり「なぜ」「どうして」と質問し、受講生一人一人にたくさん答えてもらう

以下前回からの授業形態（██████）より

・予習指導でスムーズに（受講前に↓を自習済）

①該当するページを1度読み、意味が分からない言葉には必ず線をひくこと

②線を引いた言葉の意味を辞書で調べて、ノートに「言葉」と「意味」を書くこと

コメントの追加 [0岩成4]: このようなやりとりの工夫はとてもいいですね！講師から質問するだけでなく、受講生からの質問はないか、聞いてみましょう。

<難しいと感じたこと>

・入国前なので、交通状況を体感していない点

・居住地が異なるため、具体例が統一できない点

コメントの追加 [0岩成5]: この点は本当に歯がゆく、難しいですね。でも、██████動画やレアリア、イラストなどの視聴覚教材を駆使して、できる限りの工夫をしていらっしゃるの、大変すばらしいと思います。